

## 学長定例記者会見要項

日 時： 2019年2月21日（木） 11:00～11:45

場 所： 法人本部第二会議室（小白川キャンパス法人本部棟4階）

### 発表事項

1. ヨーロッパ最古の大学・ボローニャ大学の博物館と協定締結
2. 環境変化に対する迅速な生物進化の国際共同研究拠点  
～人が変化させた環境に適応する生物たち～
3. 山形大学の研究紹介：「現代音楽」と現代の音楽  
～芸術的音楽言語の追究と聴衆への期待～
4. 地域の魅力を発信！「つつちきて」  
～山形で働く人の情熱に学生たちが迫る～

### お知らせ

1. アジアにおける食の安全・管理に関する国際シンポジウムを開催します

### （参 考）

- 次回の学長定例記者会見（予定）

日 時： 2019年3月4日（月） 11:00～11:45

場 所： 法人本部第二会議室（小白川キャンパス法人本部棟4階）

## 学長定例記者会見（2月21日）発表者

### 1. ヨーロッパ最古の大学・ポローニャ大学の博物館と協定締結

学術研究院准教授（博物館学）／附属博物館学芸研究員

さとう こと  
佐藤 琴

### 2. 環境変化に対する迅速な生物進化の国際共同研究拠点 ～人が変化させた環境に適応する生物たち～

学術研究院 教授（多様性生物学）

よこやま じゅん  
横山 潤

### 3. 山形大学の研究紹介：「現代音楽」と現代の音楽 ～芸術的音楽言語の追究と聴衆への期待～

学術研究院 准教授（作曲・音楽理論）

なぐら あきこ  
名倉 明子

### 4. 地域の魅力を発信！「つつちきて」 ～山形で働く人の情熱に学生たちが迫る～

工学部3年

たいら すぐり  
平 春来里

//

やの まさゆき  
矢野 雅之

//

はんだ かずき  
半田 和樹

2019年2月21日

## ヨーロッパ最古の大学・ポローニャ大学の博物館と協定締結

### 【本件のポイント】

- 2019年2月5日にイタリアのポローニャ大学において、山形大学・ポローニャ大学の両大学附属博物館が交流協定を締結。
- 国や規模は違っても博物館の共通する課題を協力して取り組んでいくことを目的。
- 職員の派遣等による相互交流と、両者の収蔵品による特別展の実施を検討。



### 【概要】

2019年2月5日、山形大学附属博物館は、ヨーロッパ最古の大学・ポローニャ大学の附属博物館との交流協定を締結した。また、この締結に合わせ、ポローニャ大学・ポローニャ市立チネテカ（映画博物館）・ポローニャ東洋美術研究所を会場に「日本万華鏡」と題して、ポローニャ在住日本文化研究者および山形大学教員の講座や、山形市民有志の協力による日本文化紹介ワークショップおよび、映画部門で創造都市ネットワークに加盟した山形市を紹介するための上映会などを実施した。今後も相互に職員を派遣し、互いの文化に関する交流を深めるとともに、博物館として共通する課題に協力して取り組んでいく。

### 【経緯】

山形大学附属博物館は、2017年10月に大学博物館の収蔵資料活用に関する国際シンポジウムを開催することとなり、それまでも交流のあったポローニャの関係者からポローニャ大学附属博物館長のバルツァーニ教授を紹介された。多忙によりバルツァーニ教授のシンポジウムへの登壇は果たせなかったが、佐藤琴准教授（附属博物館学芸研究員）と長年ポローニャとの交流事業を行っている山本陽史教授がポローニャ大学博物館を訪問し、大学博物館の活動に関する意見交換を行った。また、佐藤准教授がポローニャ大学附属博物館に展示してある日本の浮世絵（個人蔵・ポローニャ東洋美術研究所寄託）に関するギャラリートークを実施した。これらの交流を通して、国や規模は違っても博物館として共通の課題を有していることや、その取り組みの一環として、地域に所在する他の博物館や、市民との交流をお互いに実施していることが明らかとなった。そこで、相互の文化を理解し合いながら、共通の課題に取り組んでいくこととなり、協定の締結に至った。



### 【今後の展望】

協定に基づいた具体的な活動としては、毎年相互の職員を派遣し、互いの文化について発信するとともに、博物館経営やコレクションマネジメントなどに関する意見交換を行う。また、3年後には両者の収蔵品による特別展をそれぞれ実施することを検討している。

協定の記念に贈呈した、八木文子教授（地域教育文化学部担当）が制作した当館所蔵の結髪土偶の銅版画を手にしたバルツァーニ館長

お問い合わせ

山形大学 学術研究院准教授（博物館学）／附属博物館学芸研究員 佐藤琴  
TEL 023-628-4930 メール hakukan@jm.kj.yamagata-u.ac.jp





2月4日 山本陽史教授による江戸時代の出版文化と連句の講座



2月5日 佐藤琴准教授による展示中の浮世絵に関するギャラリートーク



2月5日 小川紳介監督ドキュメンタリー映画上映会(チネテカ)



2月6日 山形市民有志と佐藤准教授・山本教授による日本文化紹介



2月7日 阿部宏慈理事による映像文化創造都市山形に関する講義



2月2日から9日まで「日本万華鏡」と題して実施した上記事業の告知チラシの表紙

## 山形大学とボローニャ大学の交流の経緯 —800年の年の差を超えて—

- ・ボローニャ市と山形市はさまざま共通点があり、創造都市の先駆的存在として学ぶべき点が多々ある（次スライド参照）。
- ・ボローニャ大学（1088年成立）と山形大学（1878年前身の一つとなる山形県師範学校が設立）は、歴史や規模こそ異なるが、国立の総合大学であり、非英語圏にあってグローバル化に直面しているといった共通点がある。
- ・両大学附属博物館は、大学内で果たすべき役割、地域の他の博物館・美術館との連携、市民に開かれた存在となるための課題があるという問題意識を共有しており、相互交流の意義を認めている。

（作成）学術研究院教授山本陽史（日本文学）

2019/2/21

1

※山形とボローニャは規模や都市の有する産業や文化において共通点が多く、創造都市ネットワークとして活動するにあたって都市のあり方が参考になると考えた。

### ○山形市

・山形県の県庁所在地

- ・人口約25万人
- ・音楽（山響）／プロサッカーチーム／映像（ドキュメンタリー映画祭）／食文化／文学（奥の細道・現代は作家を輩出）伝統工芸（鋳物）など

2019/2/21

### ○ボローニャ市

- ・エミリア・ロマーニャ州の州都
- ・人口約38万人
- ・音楽（歌劇場）／プロサッカーチーム／食文化／映像（チネテカ・修復映画祭）／文学（ダンテ・エーコ）／伝統工芸（絹織物・機械産業）など

2

## ボローニャと山形の交流のきっかけ

- ・2011年秋、イタリア・ボローニャ市を愛した山形県出身の作家井上ひさし氏『ボローニャ紀行』をテキストに山形の街作りを考える市民の会「ボローニャの会」発足、山形大学がサポートし、2012年から本格的に活動開始。現在は市民の会「チェントロ・ポルティコ」（「ポルティコ文化研究会」）として交流活動中。
- ・井上さんは歴史と文化に加え、古い建物の活用で中心市街地空洞化を防ぐ都市政策や、中小企業の重視、障害者・高齢者・子ども・女性・失業者等の社会進出支援の行政施策等に共鳴。



2019/2/21

『ボローニャ紀行』（文春文庫）→

## ボローニャ市とは

- ・エミリア・ロマーニャ州州都、人口約38万人。古くから交通の要衝として商業が発達。
- ・ボローニャ市はユネスコ「創造都市ネットワーク」に音楽分野で加盟、その中核的存在。



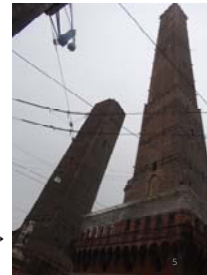
1 市庁舎の壁のレジスタンス犠牲者の写真

1

ボローニャ市街に延べ40km張り巡らされたポルティコ（柱廊）

2019/2/21

- ・食文化 パスタのボロネーゼ（ミートソース）、ボローニャソーセージなどの発祥の地
- ・音楽 モーツァルトが宗教音楽作曲の資格取得に滞在、ボローニャ音楽院でロッシニ・レズビーギらが学ぶ。リハルト＝ワーグナーやヴェルディも訪れた。市立歌劇場は東日本大震災の年に日本ツアー、仙台で演奏
- ・映画 チネテカ（映画図書館）がチャップリンの資料収集、映画修復で有名。毎年修復映画祭を開催
- ・産業 かつては絹産業、のちに機械産業が発達。マセラティ・ランボルギーニ等の発祥の地。紅茶のティーバッグ等包装機械産業も発達。現在は国際見本市が開かれる。



街の中心部の二つの斜塔→

2019/2/21

3

## ボローニャ大学

- ・ボローニャの国際商取引の発展に伴い、市民が国際法・商法の講師を資金を出して招き、ヨーロッパ最古のボローニャ大学が成立（1088年創立）。
- ・かつてダンテ、ガリレオ、コペルニクスらが学んだ。
- ・現在の学生数はおよそ10万人。
- ・『薔薇の名前』で知られる哲学者ウンベルト＝エーコ（2016年逝去）は元教授。
- ・90年代後半、中道左派連合「オリーブの木」を率いてイタリアの政権を担ったブローディ元首相（のち欧州委員会委員長）はボローニャ大学の教授（経済学）から政治家に転身。



2019/2/21

4

## これまでの主な交流

- ・2013年秋、ボローニャ市役所にマウロ・フェリコーリ経済プロモーション局長を訪問。ボローニャ大学・同博物館・チネテカ（映画図書館）・女性図書館を視察。山本陽史が東洋美術研究所で井上ひさしについて講演。
- ・2014年秋、ボローニャで俳句ワークショップを開催。
- ・同時に劇団「フラテルナル座」による井上ひさし「父と暮らせば」イタリア語版公演で山本陽史が解説担当。
- ・2015年秋、山形国際ドキュメンタリー映画祭に合わせボローニャ大教授ジャコモ・マンツォーリ氏を招き、山形大学等でボローニャの映画産業等についての講演会開催。
- ・2015年秋、フラテルナル座山形公演をプロデュース。



2019/2/21

5

## 2016年

- ・2月、荒木志伸准教授がボローニャ大で災害考古学の講義。
- ・文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」に「山形の文化遺産を世界に発信するプロジェクト」に山形大学附属博物館が採択。
- ・9月 山本陽史がボローニャで山形の文化について講演。佐藤琴准教授と現地で浮世絵調査。
- ・10月 山形大職員がボローニャ大学農学部等を訪問し、非英語圏の大学で英語で授業を行う留学生プログラム等について調査と意見交換。
- ・11月 世界遺産カゼルタ宮殿総責任者に転身したマウロ・フェリコーリ氏を招聘、山形大、山形市役所で創造都市に関する講演・シンポジウム開催。彼は創造都市ネットワークの仕掛け人の一人。

2019/2/21

6

## 2017年

- ・1月 ボローニャ東洋美術研究所長アレクサンドロ・グイディ氏を招聘。
- ・8月 ボローニャ大音楽研究者マッテオ・カザーリ准教授を招聘、松山能・黒川能の調査に協力。
- ・9月 ボローニャ大学附属博物館でギャラリートーク、中学校で俳句ワークショップ、ボローニャにある日本美術資料調査。
- ・この時、ボローニャ大附属博物館長ロベルト・バルツァーニ教授と大学博物館を取り巻く情勢と地域交流のあり方、ネットワーク構築の重要性について意見交換。
- ・10月 山形市で開催した創造都市国際会議に、ボローニャ市立チネテカ映像部門責任者アンドレア・メネグッリ氏招聘。
- ・秋に招聘予定であったバルツァーニ館長がエミリア・ロマーニャ州文化局長に就任（併任）したため、取り止めたがその後も連絡を継続。



チネテカ→

2019/2/21

7



平成31年（2019年）2月21日

## 環境変化に対する迅速な生物進化の国際共同研究拠点

～人が変えた環境に適応する生き物たち～

### 【本件のポイント】

- 拠点形成支援開始から約2年が経過して、国内研究やインドネシア側との共同研究が軌道に乗り、研究拠点として成果があがってきています。
- 生物の迅速な進化は、人間によって急速に改変されている自然生態系の応答として、重要な意味を持っています。
- 平成31年3月10日（日）13時より、今回理学部ふすまホールにて生物の迅速な進化に関する国際シンポジウムを公開で開催します。



### 【概要】

人間活動による大規模な環境変化は、生態系の質を低下させています。この生態系機能の低下に対して、迅速な生物進化が生じることが近年わかってきました。本拠点では、人間活動などによる環境変化に対する生物の応答としての「迅速な生物進化」に注目して研究し、その成果を世界に向けて発信する「環境変化に対する迅速な生物進化の国際共同研究拠点」が山形大学先進的研究拠点（C）形成支援に採択され、研究だけでなく、国際貢献や人材育成に関する様々な活動を行ってきました。自然生態系を構成する昆虫・植物・微生物など、様々な生物を対象に、環境変化に対する迅速な進化を解明することを具体的な目的として、日本（温帯域）とインドネシア（熱帯域）の両国で研究を展開しています。

支援開始から2年が経とうとしている現在までに、国内・海外共同研究双方に進展がありましたので、ここではその中から（1）哺乳類の増加に対応する植物の応答、（2）移入植物に対する植食性昆虫の応答、（3）都市部に生育する植物と昆虫との関係、（4）農法が水田の生物群集に及ぼす影響について、得られた成果の簡単な紹介をいたします。これらの詳細、および今後の研究の展開や、成果を応用（生態系の保全、国際貢献、人材育成など）については、平成31年3月10日（日）に山形大学で開催する予定の公開国際シンポジウム、“International Symposium on Rapid Evolutionary Change of Invertebrates, Plants, and their Interactions under Ecological Disturbance”で詳しく報告・議論いたします。

### 【背景】

人間活動などによる環境変化に対する生物の応答としての「迅速な生物進化」に注目して、平成29年（2018年）度から山形大学先進的研究拠点（C）「環境変化に対する迅速な生物進化の国際共同研究拠点」の採択を受け、環境変化に対する「迅速な生物進化」を統合的に明らかにするため、インドネシアの拠点などと共同で、研究を進めてきました。また、本拠点では、先端的な研究成果の発信だけでなく、環境保全や人材育成にも貢献できる拠点形成を目指しています。支援開始から約2年が経過し、国内およびインドネシア側との研究体制が整い、さまざまな成果が得られています。

### 【研究手法・研究成果】

#### （1）哺乳類の増加に対応する植物の応答

哺乳類、特に草食獣の増加は、全国的に深刻な問題となっており、その中でもニホンジカは、生息域の各地で植生の衰退を引き起こしています。ニホンジカが近年になって増加した場所と、ニホンジカの影響を受けていない場所で同じ種類の植物を比較すると、一部の植物はニホンジカが増えたことによって明らかに小型化していることがわかりました。

#### （2）移入植物に対する植食性昆虫の応答

人間活動によって、世界中でさまざまな移入種がはいりこみ、その一部は旺盛に増殖したり、在来の生物を駆逐したりして問題になっています。植食性昆虫は、しばしば新しい餌植物への転換を起こす進化をしますが、移入植物のように本来その場所にはいなかった植物への転換が始まると、その現象を時系列を追って調べることができるため、進化研究のよい材料になります。移入植物を防除する新たな資源となりうることも期待できます。インドネシアとの共同研究で、移入から数十年～100数十年程度で、植食性テントウムシの一部の種が移

入植物を利用し始め、適応を進めている状況が明らかになってきました。

(3) 都市部に生育する植物と昆虫との関係

都市環境は人間が変えた環境の最たるものですが、一般に野生生物にとっては棲みにくい環境でもあります。しかし、一部の野生生物は、都市環境で野生環境と同じような生活を営んでいるものもあります。インドネシアとの共同研究で、都市環境に進出している野生植物が、繁殖に必須、ないしは悪影響のある昆虫とどのように関わっているのかが明らかになってきました。

(4) 農法が水田の生物群集に及ぼす影響

農業はしばしば生物に悪影響を及ぼします。特に化学肥料や農薬を用いる慣行農法ではその影響が顕著です。しかし最近ふえつつある環境保全型農法には水田の生物を増やす効果があります。インドネシアとの共同研究で環境保全型農法により特に貝類において多様な群集が形成されるのが明らかになってきました。

## 【今後の展望】

これらの研究は、人間が急速に野生生物の生息環境を変化させてしまっている現在、迅速な進化を遂げてそれらに対応している生物がいることを浮き彫りにしています。こうした生物の迅速な進化は、人間による急速な変化を余儀なくされている自然生態系の応答として、重要な意味を持っていると思われます。こうした成果は、今後学会・学術誌等で公表していく予定ですが、平成31年3月10日（日）に山形大学で開催する予定の公開国際シンポジウム、“International Symposium on Rapid Evolutionary Change of Invertebrates, Plants, and their Interactions under Ecological Disturbance”でも詳しく報告します。

■日時：平成31年3月10日（日）13:00～

■場所：山形大学理学部ふすまホール（S401）

■使用言語：英語

■申込み：事前申込み不要、参加費は無料

■発表者

横山 潤（山形大学学術研究院教授（多様性生物学））

“Two Tales of Plant Evolution in Changing Environment”

「変動する環境における植物進化の2つの話題」

藤山直之（山形大学学術研究院准教授（進化生態学））

““Phenotyping” of Host-Use Ability as the Critical Step in Studies on Population Divergence in Herbivorous Insects via Adaptation”

「適応を介した植食性昆虫の集団分岐の研究における重要なステップとしての寄主利用能力の表現型査定」

Budi Setiadi Daryono博士（ガジャマダ大学生物学部・学部長）

“The Dynamics and Evolution of Plant Viruses in Indonesia Influenced by Climate Change”

「インドネシアにおける気候変動の影響による植物ウイルスの動態と進化」

Shi Kahono博士（インドネシア科学院生物学研究所動物学部門・Senior Researcher）

“Rapid Responses by herbivorous ladybird beetles to the invasion of novel host plants to Java, Indonesia”

「インドネシアジャワ島に侵入した新しい寄主植物への植食性テントウムシ類の迅速な応答」

Himmah Rustiami博士（インドネシア科学院生物学研究所植物標本館・単子葉植物部門キュレーター）

“The Past, Present and Future of Herbarium Bogoriensis”

「ボゴール植物標本館の過去・現在・未来」

お問い合わせ

学術研究院 教授 横山 潤（多様性生物学）

TEL 023-628-4772 メール jyokoyam@sci.kj.yamagata-u.ac.jp

## 「現代音楽」と現代の音楽 ～芸術的音楽言語の追究と聴衆への期待～

### 【本件のポイント】

- 作曲・音楽理論を専門とする教員名倉明子准教授の作品紹介
- 教育では、地域教育文化学部音楽芸術コース・文化創生コース主担当
- 山形県小中高等学校児童生徒作曲コンクール審査員など、音楽を通じた地域貢献の実績多数



### 【概要】

山形大学学術研究院名倉明子准教授（作曲・音楽理論）は、地域教育文化学部文化創生コースの担当教員として、学生教育を行うとともに、数多くの作曲・編曲作品も手がけています。

昨年度は学生のために書き下ろした混声合唱作品《鐘のさまざま》を発表したほか、今年度は、山形大学混声合唱団のために作曲した作品が、2月23日（土）に初演されます。

また、山形県小中高等学校児童生徒作曲コンクール審査員など、音楽を通じた地域貢献にも力を注いでいます。

### 【作品の紹介】

- 夢虫（ヴィブラフォンと打楽器）（2019）
- よだかの星－宮沢賢治「よだかの星」によせて－（ソプラノとピアノ）（2019）
- 二重の二重星 ～フルート、クラリネット、ヴァイオリン、コントラバスのために～（2018）
- 「鐘のさまざま」より（混声合唱とピアノ）（2017）
- Iridescent Reflection for string orchestra（2017）
- 薄 | 椿 ～琵琶とチェロのために～（2017）
- 「女みんな、心の内側に庭園をもっている。」～ピアノ・ソロのために～（2016）

お問い合わせ

学術研究院 准教授 名倉明子（作曲・音楽理論）

TEL 023-628-4341 メール nagula@e.yamagata-u.ac.jp



平成31年（2019年）2月21日

## 地域の魅力を発信！「つっちきて」 ～山形で働く人の情熱に学生たちが迫る～

### 【本件のポイント】

- 「山形大学と交流する会」の学生コーディネーターは、山形での多様な生き方を若い世代と共有することを目的に、地域で活躍する方々の仕事に対するビジョンや情熱を、Facebookを通じて発信する新企画を立ち上げました。
- これまでの活動から、地域に引き継がれる在来知を学ぶことの重要性を感じ、今回の企画を計画しました。
- 若い世代が、地域の方々の素晴らしい活躍に着目するきっかけとなることを期待します。



### 【概要】

「山形大学と交流する会」の学生コーディネーターは、山形大学と地域社会の交流の活性化を目的として、学部ごとに特色ある活動を行っています。今回は、山形で活躍する方々の仕事に対するビジョンや情熱などの魅力的な一面を、Facebookを通じて発信していく新企画「つっちきて」を立ち上げました。「つっちきて」とは山形県置賜地方の方言で、「つれてきて」という意味です。学生コーディネーターが、地域の魅力を発見し、山形大学に「つれてきたい」という思いから名付けました。

本企画の第一弾は、東根市で農業を営む秋葉慶次さんの紹介です。お米やさくらんぼだけではなく、「ソーラーシェアリング」により電気も生み出す秋葉さんの熱い思いにせまりました。

### 【背景】

「山形大学と交流する会」は、山形大学における研究の発展と人材の育成を支援するとともに、会員企業様と山形大学の職員及び学生との交流を推進することによって、地域の活性化等に寄与することを目的としています。

「山形大学と交流する会」の学生コーディネーターは、学生AA（アドミニストレイティブアシスタント）として山形大学の職員として活動しており、様々な活動を自ら企画し、実施することで地域の活性化の一環を担っています。これまで、米沢の伝統野菜「雪菜」や「遠山かぶ」を使ったプロジェクトや、鶴岡在来作物の魅力共有する体験型イベントを実施するなど、県内各地で地域の方々との交流を図ってきました。

地域産業において、次世代の担い手不足は深刻な問題です。これまでの活動から、私たち自身が、地域の方々の思いや、そこに脈々と引き継がれる在来知を学ぶことの重要性を感じ、その魅力を共有することで、若い世代が、地域の方々の素晴らしい活躍に着目するきっかけづくりとなるのではと考え、今回の企画を立ち上げました。

### 【今後の展望】

現在、「つっちきて」第二弾を計画しています。今回の取材を通じ、新しい出会いと言葉を大切にしながら、柔軟な企画構成を検討することの重要性を感じました。山形で活躍する方々の熱い思いから学び、自分たち自身の将来についても考えていきたいと思えます。



↑ 山形大学と交流する会の  
Facebook ページはこちら

### 【お問い合わせ】

山形大学と交流する会事務局（五味・佐藤）

TEL：023-628-4844

MAIL：yamagata.kouryuu@gmail.com

記事公開日：2019/2/15



つっちきて第一弾

## 秋葉 慶次 さん

### 「時代はつくっていくもの」

記念すべき「つっちきて 第一弾」は東根市で専業農家を営む秋葉慶次さんだ。

秋葉さんがつくっているのはサクランボやお米だけではない。田んぼの上に設置されたソーラーパネルで発電を行う“ソーラーシェアリング”で電気も生み出している。

“つっちきて”

山形県置賜地方の方言。「つれてきて」という意味。

地域の魅力を山形大学に「つれてきたい」という思いから名付けました。

山形で行動を起こした方々への取材をとおして、ここで暮らす魅力を見つけ、発信していきます。

### ソーラーシェアリングとは

農地を使って行う太陽光発電事業のこと。平成24年7月に開始されたFIT制度（固定買い取り制度）により、農地に支柱を立てて、農業を継続しながら、上部に太陽光発電設備を設置する、営農型発電設備の導入が全国各地で進んでいる。



田んぼソーラー

上の写真は4年前に秋葉さんが始めたソーラーシェアリングの第1号のもの。

支柱には太めの48mm単管パイプを使い、太陽光パネルは東京の展示会で見つけた単結晶の5インチセルのものを使用。効率のいい配線も自ら考えた。





次に見学したのはワラビ畑のソーラーシェアリング。

1カ所のレバーを手動で動かすと…

全体 648 枚の約 1/3 のパネルの角度が一斉に変化！

(取材班一同：おーー！)

発電量を考え、積雪のある冬場は 60 度、夏場は 5 度になっている。

「全国ではいろんなことを考える人がいるんだよ」と秋葉さん。

創意工夫を凝らして楽しみながらソーラーシェアリングをしている様子がうかがえた。

もともと田んぼだったが、耕作放棄地となってから長いこの場所。

扇状地の下の方であるため水はけが悪く、ワラビが育つ水はけのよい土地にするために深さ約 50cm ほどの溝を掘ったそう。

ワラビ畑のソーラーシェアリングでは昨年 84,000kWh を発電し、想定よりも 2 割多い発電量だった。(一年間の一世帯あたりの電力消費量は約 3000kWh 参考：電気事業連合会 HP)



さくらんぼ市民共同発電所

「市民による手づくりの発電所」として東根に 2015 年に誕生した「さくらんぼ市民共同発電所」。山形県民参加型再生可能エネルギー発電事業の第 1 号でもある。市民サポーター 86 名の協力を得て完成した。

パネルの裏には、市民のみなさんの手書きのメッセージが。

農産物リポーターの皆さんには出資のリターンとして東根市産のお米やさくらんぼを 5 年間送っている。

## 秋葉さんへのインタビュー

新しいことに次々と取り組む秋葉さん。その原動力は何なのか。

見学のあとはご自宅でお話を伺った。

(文責：インタビュアー工学部 3 年平)

### 自分の目で被災地を見る 経済的に持続可能かを判断する

……………

一平) 問題意識をもち、行動を起こすには何が必要でしょうか。

秋葉さん) (以降：秋) 私が発電事業に乗り出したバックグラウンドにはチェルノブイリ原発事故後に横浜で反原発の活動をしていたことにあります。本を読んだり、デモや集会に参加するうちに自然と原発に関する知識が身につきました。

東日本大震災直後の 2011 年 5 月、家族と一緒に福島県の飯舘村を訪れました。とにかく被災地をこの目で見ておかなければいけないと思ったからです。

その後横浜の仲間達と再び訪れ、線量計を片手にいろんな場所の放射線量を測りました。地面の近くや森の中は特に高かったです。線量計の表示上限を超えたところもありました。

一平) 自分の目でみて自分の考えをもつこと。それがきっかけとなったんですね。太陽光発電を始めたのは、もともと反原発だったということが一番大きな理由ですか？

秋) ソーラーシェアリングを始めることができた一番大きい要因は経済的なことです。

平たく言えば発電事業を始めて「事業として成り立つ」ということ。

いろんな考えを持っていたとしても、儲からなければ始めません。

チェルノブイリ事故後の反原発の広がりの中、代替エネルギーはどうするのかという声が多くありました。30 年経って技術が進歩し、FIT 制度などができ時代が変わりました。

今は太陽光のみならず、風力、水力 (小)、バイオマスなど再生可能エネルギーがあります。そのなかでも太陽光発電は個人でもできます。

減反政策がなくなり、主食米の需要が年々減少するなか、コメ価格の下落が心配されます。

減反政策がなくなり、主食米の需要が年々減少するなか、コメ価格の下落が心配されます。

減反政策がなくなり、主食米の需要が年々減少するなか、コメ価格の下落が心配されます。

減反政策がなくなり、主食米の需要が年々減少するなか、コメ価格の下落が心配されます。

減反政策がなくなり、主食米の需要が年々減少するなか、コメ価格の下落が心配されます。

減反政策がなくなり、主食米の需要が年々減少するなか、コメ価格の下落が心配されます。

減反政策がなくなり、主食米の需要が年々減少するなか、コメ価格の下落が心配されます。

減反政策がなくなり、主食米の需要が年々減少するなか、コメ価格の下落が心配されます。

減反政策がなくなり、主食米の需要が年々減少するなか、コメ価格の下落が心配されます。

減反政策がなくなり、主食米の需要が年々減少するなか、コメ価格の下落が心配されます。

減反政策がなくなり、主食米の需要が年々減少するなか、コメ価格の下落が心配されます。





## 組織にあっても市民意識を忘れないで

一平) 学生へのメッセージをお願いします。

秋) これから就職活動を始める大学生も多いでしょう。大きな組織に入ると個人の考えに基づく発言が難しくなります。会社の利益や業界の競争ばかりに気が向くと、どうしても社会に目を向けなくなってしまふ。でもいつか社会問題とぶつかる 때가きます。今、社会全体がどう動いているか、それに対して自分はどうか考えるかを忘れないことが大切です。私は農家として、個人で行動しています。私はいくつかの会社に勤めていたこともありましたが、その後自営業を始めました。自分としては「元祖フリーター」であると思っています(笑)

元号が変わっても時代は変わらない。  
新しい時代をつくっていくのはあなたたちの世代です。



一平) 秋葉さんの今後の展望を教えてください。

秋) 私自身、経営的にこれ以上拡大するつもりはありません。いくら一人で頑張っても、私だけ儲かっても意味がないんです。

むしろソーラーシェアリングを世の中全体に広めていきたいと考えています。山地が多い日本で、まだまだ太陽光発電を増やすには農地で行うソーラーシェアリングが有力な一つと思います。あちこちで講演したり、いろいろな人の見学を受け入れているのもそのためです。

昨年からはソーラーシェアリングをワラビ畑でも始めました。おじいちゃん、おばあちゃんが山に行かなくとも、ワラビ狩りを楽しみ、集落の交流の場になればいいと思っています。

## 秋葉 慶次(あきば けいじ)さん

東根市で果樹・米・電気をつくる家族経営の専業農家。  
東京出身。いくつかの会社勤めを経て、横浜で住宅設備の自営業を始める。  
1995年 結婚をきっかけに、妻の実家がある山形に移り、農業に従事する。  
2015年からソーラーシェアリングを始める。自身の農園には2カ所に発電設備を設置。  
また山形県県民参加型再生可能エネルギーの発電事業第1号に認定された、「さくらんぼ市民共同発電所」の所長も務める。

## まとめ

私は今大学3年生。まわりは就活を本格的に始めている。当たり前のことだが、ほとんどの学生がいずれ就職して会社の一員となる。私も社内で認められたいと思えば、自分の意見を抑えて会社の利益を追求するかもしれない。しかし今回の取材をとおして、組織の一員である前に個人でありつづけるべきだという心構えを学んだ。

「自分でうごいてみないと、分からないことが多い」  
設備や初期投資について逐一質問していた私に、秋葉さんが投げかけたこの言葉が胸にささった。被災地にすぐに赴き、自分の目で原状を確認、経営を含めた冷静な判断をくださった秋葉さん。行動を起こした背景には常に市民として社会に疑問を持つ意識があった。

(山形大学工学部3年 平 春来里)

## 【取材班】

カメラマン：佐藤 謙介(工学部4年)

記録(メモ)：半田 和樹(工学部3年) インタビュアー：平 春来里(工学部3年)

2019年2月21日  
山形大学

\* 詳細は別添の資料をご覧ください。

## 1. アジアにおける食の安全・管理に関する国際シンポジウムを開催します

食に関わるアジア諸国の大学・研究機関ならびに大学間交流協定締結5周年となるタイ・チェンマイ大学との国際共同研究の推進を図るため、国際シンポジウムを鶴岡キャンパスで開催します。

日程：2019年3月14日（木）～16日（土）

会場：鶴岡キャンパス

※これまでの定例会見でお知らせしたもので、開催が迫っているイベント

### ◎「山形大学SCITAセンターサイエンスカフェ」を開催

～大人も子どもも自然科学を楽しく語ろう～

開催日時：2019年2月23日（日） 14:00～16:00

会場：観光文化交流センター「山形まなび館」 交流ルーム

### ◎シンポジウム「ネットワークによる山形のダイバーシティ推進～現状と今後の展開」を開催

開催日時：2019年3月8日（金） 14:00～16:30

会場：小白川キャンパス法人本部3階第一会議室

平成31年（2019年）2月21日

## アジアにおける食の安全・管理に関する国際シンポジウムを開催します

～1<sup>st</sup> international symposium on “Recent trend/technology of food security and management in Asia”～

### 【本件のポイント】

- 食に関わるアジア諸国の大学・研究機関ならびに大学間交流協定締結5周年となるタイ・チェンマイ大学との国際共同研究の推進および学生交流活動の発展を図る。
- アジア諸国から外国人研究者を招待講演者として招聘し、食の安全・管理に関する最新の技術動向・研究成果について紹介。
- 本シンポジウムへの学生の講演・参加により、大学相互ならびに学生交流の促進が期待される。



### 【概要】

現在、日本ーアジア諸国間における食品・農作物の輸出入取扱量の増大、嗜好・ニーズの変化に伴い、大学等研究機関において、様々な取り組みが進められています。本シンポジウムでは、アジア諸国からの外国人研究者を招待講演者として招聘し、アジアにおける食の安全・安心、保存・管理・流通等に関する最近の動向・技術・研究成果について発表および意見交換します。情報を共有し、大学相互並びに学生交流の促進を目指します。

### 【国際シンポジウム “Recent trend/technology of food security and management In Asia”】

- 日 程：2019年3月14日（木）～16日（土）
- 場 所：山形大学農学部 鶴岡キャンパス
- 対 象：本学教員、学生
- スケジュール：

#### 3月14日（木）10時00分～12時30分、14時00分～16時00分 プレゼンテーション

〈プログラム〉 ◎メイン発表となるため、取材はこの日をお願いいたします。

“Food Safety Trends for the Foodservice Industry in Thailand: A Case study of Chiang Mai University”

Dr. Sorraya Khiewnavawongsa (CMU\* Agro-industry)

“Rice Starch Modification Using Plasma Technology”

Dr. Pilairuk Intipunya (CMU Agro-industry)

“Technology in Plant Food Productions of Northern Thailand: Opportunities in Research”

Dr. Pongsakorn Suppakittpaisarn (CMU Agriculture)

“Modification of bee wax using as coating materials for some fruit and flower”

Dr. Wilawan Kumpoun (CMU-STRI)

他、国内外から20件。

※CMU=チェンマイ大学（タイ）

#### 3月15日（金）10時00分～12時30分 プレゼンテーション

13時00分～14時00分 ディスカッション（今後の展望について）

#### 3月16日（土）9時00分～13時00分 テクニカルツアー

お問い合わせ 学術研究院准教授 渡辺昌規（バイオマス資源学）  
TEL 0235-28-2848 メール mwata@tds1.tr.yamagata-u.ac.jp





1<sup>st</sup> International Symposium on

*“Recent trend/technology of food security and management in Asia”*

**14-16<sup>th</sup> March 2019**

**Tsuruoka, Yamagata JAPAN**



**Organizer**

Faculty of agriculture,  
Yamagata University

